

模擬患者を活用した教育方法の検討

—学生の評価能力の育成に向けて—

堀美紀子*, 松村千鶴, 淘江七海子

香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科

A Consideration of Teaching Methods Using Simulated Patients

—For Developing Nursing Students' Abilities in Evaluating Ways of Nursing—

Mikiko Hori*, Chizuru Matsumura and Namiko Yurie

Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences

Abstract

This study analyzes the effects of practice using simulated patients (SPs) on the nursing students, and their evaluations of the four situations in which they were taken care of during the practice. The aim is to cultivate students' evaluative ability. Four practical nursing care situations (as close as possible to realistic situations) were set up in the practice, in which 50 nursing students and 8 teachers participated. The results are as follows:

1. Practice using SPs was effective in the students' affective domain.
2. Analysis of students' comments reveals 5 categories: (1) the effects of the practice on them, (2) SPs' practical use, (3) applying communication skills to the situations, (4) getting self knowledge through the practice, and (5) points which were deemed insufficient in the practice.
3. Especially in the nursing technique, evaluations of the practicing students' performances made by observing students were higher than evaluations of those made by teachers.
4. Practice using SPs is of highly practical use for developing students' abilities in evaluating their own nursing methods and performance as well as that of others.
5. It is also effective in improving the teachers' skills and abilities.

Key Words : 模擬患者 (Simulated Patients), 看護学生 (Nursing Students),
自己評価 (Self-Evaluation), 教育方法 (Teaching Method)

*連絡先: 〒761-0123 香川県木田郡牟礼町大字原281-1 香川県立保健医療大学保健医療学部看護学科 堀美紀子

*Correspondence to: Mikiko Hori, Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences, 281-1 Hara, Mure-cho, Kita-gun, Kagawa, 761-0123, Japan

はじめに

看護実践は、看護者自身が築いていく看護の対象者との人間関係を基盤にして行う。多様な価値観をもつ人々や自分と世代や立場の異なる人々の思いや考えを理解し、その理解に基づいてその人と円滑に意思疎通を図れる能力、ケアに必要な援助的人間関係を形成していく能力が卒業時まで求められる¹⁾。

これまでの看護教育においては、臨地実習(以下、実習とする)前の学内演習には、患者役と看護師役を学生同士が演じたり、教員が患者役になって演じるロールプレイングという方法が採り入れられてきた。しかし、これらの方法は、実際の患者とかかわる実習場面とは大きくかけ離れているという欠点があり、模擬患者(Simulated Patients, 以下、SPとする)を活用した教育が導入されるようになってきた。SPを活用した教育の大きな利点は、学生の能力に合わせて患者や場面を設定できる点や学生のコミュニケーションや看護実践の場面をその場で振り返って議論でき、SPや教員からその場でタイミング良くフィードバックが得られる点である。

香川県立医療短期大学(以下、本学とする)では、実習前の準備教育として、看護実践場面での患者に対する基本的なコミュニケーション技術や態度を修得することを目的に、平成14年度からSPを活用したコミュニケーション演習(以下、演習とする)を導入している。面接という状況では互いに構えてしまい、患者のありのままのコミュニケーションが得られにくいことや、患者との相互作用の展開を体験するために、看護師と患者の日常的な看護ケア場面を設定した方が望ましいと考え、単なる会話だけの演習ではなく、できるだけ実習での看護実践場面に近い状況を設定して実施している。

前回の報告²⁾で、学生の興味関心を刺激し、情意領域において効果的であったこと、援助的コミュニケーションのあり方への気づきを深めていたこと、看護師役を体験した学生は、患者への細やかな配慮や患者の言動や気持ちの確認等が実習時に生かされており、実際に体験することの意義が大きいこと等、SPを活用することによる学習効果を明らかにした。

本学が実施している演習は、看護師役以外の学生は観察者として参加する。多くの仲間と一緒に同じ場面を観察して議論することで、場面状況を客観的に捉えて洞察を深める力や議論する力を獲得する機

会となり得る。看護教育におけるSPに関する報告の多くは、コミュニケーション能力の向上³⁻¹⁴⁾や看護過程の展開(観察、情報収集、アセスメント、看護計画の立案)¹⁵⁻¹⁸⁾、フィジカルアセスメント^{19, 20)}、実技試験²¹⁻²³⁾を目的にSPを活用し、その効果を評価したものである。洞察力や議論する力の修得を目的にSPを活用しているという研究報告は見当たらない。

平成15年度は、事例毎に学生がどのくらい客観的に洞察できているかをチェックリストを用いて分析を行った。その結果、より効果的にSPを活用するための教育方法に示唆を得たので報告する。なお、ここでいうSPは、学生や教員以外の者が演じている患者役とする。

目 的

SPを活用することによる演習効果と、学生の場面状況の洞察力を教員との演習評価の相違から明らかにし、学生の客観的な評価能力の育成について検討する。

方 法

1. 対象：演習に参加した本学看護学科1年次生50名、および教員8名である。
2. 倫理的配慮：演習の終了後に、本研究の趣旨とプライバシーの保護、自由意思による参加であること、結果を学会等で発表することを、口頭および書面で説明し、同意を得た。学生にはさらに承諾の有無が成績には関与しないことを加えた。
3. 研究方法：演習は、基礎看護学実習I-②(日常生活援助を実施する1年次の3日間の実習)前に90分2コマを充てて実施した。

SPは、患者シミュレーションの訓練を受けている香川大学SP研究会のメンバーで、医学生に外来診療における問診や客観的臨床能力試験(Objective Structured Clinical Examination; OSCE)に協力している健康な市民である。今回の演習には、設定事例に合わせた40~60歳代の女性3名と60歳代の男性1名に協力を得た。

調査内容は以下の通りである。

- 1) 各事例の振り返り時に、実際に看護師役を演じた学生は自己評価を、観察していた学生と教員は他者評価をチェックリストを用いて行った。チェックリストは振り返りが具体的になる

ように、藤崎²⁴⁾のコミュニケーションのポイントを参考に、事例毎にオープニング（2項目）、共感的コミュニケーション（2項目）、傾聴・情報収集（3～4項目）、援助技術（6～9項目）、問題解決・マネジメント（1～2項目）、クロージング（2項目）のコミュニケーションや援助技術のポイントを挙げ、「できた」から「できなかった」の4段階評定とした。チェックリストの例を表1に示す。

- 2) 演習後にSP活用による演習の評価や感想等についてアンケート調査を行った。その内容は、SPを活用した演習は楽しいか、難しいか、集中できたか、リアリティがあるか、役立つか、看護師役をしてみたいか等の6項目について「はい」「どちらともいえない」「いいえ」の3件法と、それぞれの理由、演習の感想の自由記載である。
4. 分析方法：1) チェックリストの「できた」1点から「できなかった」4点を配した。（高得点ほど低評価である。）事例により評価項目数が異なるので、6つの各評価項目（オープニング、共感的コミュニケーション、傾聴・情報収集、援助技術、問題解決・マネジメント、クロージング）の平均値を求め、t検定にて学生と教員間を比較した。統計解析はSPSS 11.0 J for Windowsを

使用し、有意水準を0.05とした。

- 2) アンケート調査は単純集計と、自由記載である感想の内容については本研究3名で類似性のある内容を独自に整理した後、3名でデータの一致を繰り返し吟味し、コード化、サブカテゴリー化、カテゴリー化を行った。
5. 演習の概要：事例1；多発性硬化症で全盲の全面介助を要する患者に食事援助をしながら会話する場面、事例2；卵巣癌で手術を翌日に控えた患者が血圧測定後に癌の転移の不安を訴える場面、事例3；脊髄損傷で下半身不随を医師から告げられた患者が寝衣交換後下肢が動くことを願う会話場面、事例4；肝硬変で黄疸、全身倦怠感等があり入浴許可が出ていても清潔ケアを拒む患者への指導場面である。各事例10分間のセッションを行い、セッション終了毎に個人、グループの振り返り、SP、教員からのフィードバックを行った（図1）。各事例1名の計4名の学生が看護師役を演じ、他の46名は観察者としての参加であった。学生には1週間前にオリエンテーションを行い、事例や演習の進め方を説明し、各事例の援助の注意点、観察点、配慮等の事前学習を課した。また、全員がSPとのセッションの可能性のあることを説明し、看護師役は演習の当日に教員がランダムに4名を選出した。

表1 患者とのコミュニケーションにおけるチェックリスト（事例4）

1. オープニング	4) 患者が質問しやすくする
1) あいさつ、自己紹介、患者確認ができる	5) 患者の気持ちや理解のテンポにあわせる
2) 援助の目的を患者に告げ了承をとる	6) 断り続ける患者から、入浴してみようという言動がうかがえる
2. 共感的コミュニケーション	5. 問題解決・マネジメント
1) 視線を合わせ、適切な姿勢・態度をとる	1) 患者の自己決定を援助する
2) コミュニケーションを促進させる言葉かけや相づちを使う	2) 問題解決の糸口を見つける
3. 傾聴・情報収集	6. クロージング
1) 身体的情報を聴く	1) 言い残したことがないか尋ねる
2) 生活や個人的情報を聴く	2) 何かあればいつでも相談できることや次の予定を話す
3) 病気に対する思いや不安を聴く	
4. 説明・情報提供・患者教育	評価尺度
1) 歯磨きの方法や効果をわかりやすい言葉で説明し、丁寧な歯磨きを実施する	①できた
2) 歯磨きの準備から後片付けまで迅速にする	②どちらかといえばできた
3) 入浴の効果・方法など、納得できるわかりやすい説明をする	③どちらかといえばできなかった
	④できなかった

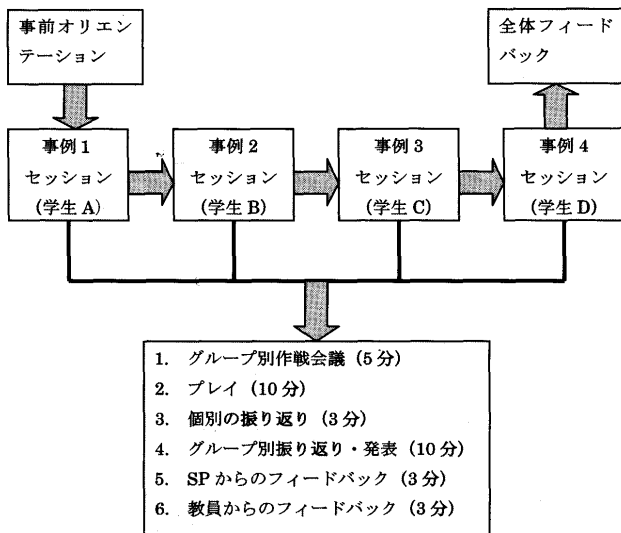


図1 演習の手順

結果

1. 学生-教員間の評価の相違について (表2)

- 4事例ともに学生-教員間で有意差があったのは援助技術に関する評価項目であり、いずれも教員の方が評価が低かった。事例毎に援助技術は異なるが、「患者の気持ちや理解のテンポに合わず」はどの事例も有意に教員の方が評価が低かった。
- コミュニケーションに関する項目では、事例1以外は傾聴・情報収集の評価項目に有意差があり、「病気に対する思いや不安を聴く」ことに評価の相違があり、教員の方が低かった。事例3では、共感的コミュニケーション、「コミュニケーションを促進させる言葉かけや相づちを使う」に有意差があり、教員の方が低かった。

2. アンケート調査による学生の演習評価

- SPを活用した演習は30名(60%)が楽しいと答えた。その理由は「学びが多かった」、「臨場感がある」、「新鮮」等であった。また、48名(96%)が難しいと答え、「臨機応変さを求められる」、「緊張する」、「一つの行動でも受け止め方が違う」、「知識・技術が未熟」等がその理由であった。集中できたかという問いには49名(98%)が集中できたと答え、「看護師役で見ていたから」、「今までの授業とは異なり興味があった」等と理由を答えた。リアリティがあるかという問いには46名(92%)があると答え、その理由は「本当の患者のようでSPの演技が上手」、「SPは初対面である」、「会話の内容が実際にありそう」であった。また、100%の学生が役立つと答えているが、看護師役をしてみたいかという問いには、31名(62%)が「緊張する」、「自信がない」、「知識・技術が未熟」、「不安」等の理由で消極的であった(表3)。

- 演習の感想の自由記載では、全コード数123が抽出された。それらを分類すると、〈振り返りの効果〉〈自分で対処方法を考える効果〉〈効果的なコミュニケーションの方法〉〈SPの授業の有効性〉〈事前学習の有効性〉〈今後に向けての学習効果〉の6つのサブカテゴリーからなる《学習の効果》、〈SPに対する戸惑い〉〈SPの有効性〉の2つのサブカテゴリーからなる《SP活用の感想》、〈臨機応変な対応への戸惑い〉〈看護師役への思い〉〈個別性を考慮した対応の必要性〉の3つのサブカテゴリーからなる《コミュニケーション技術の統合》、〈未熟な自分の今後の課題〉〈自己の気づき〉の2つのサブカテゴリーからなる《SPを通して気づいた自己》、

表2 各評価項目平均値の学生-教員間の比較

評価項目	事例1			事例2			事例3			事例4		
	学生	教員	検定	学生	教員	検定	学生	教員	検定	学生	教員	検定
オープニング	1.88	2.00		1.44	1.86	*	1.21	1.13		1.39	1.81	*
共感的コミュニケーション	1.47	1.79		1.62	1.93		1.41	2.00	*	2.14	2.44	
傾聴・情報収集	2.82	2.75		1.60	2.48	**	1.54	2.04	**	2.50	2.83	*
援助技術	1.81	2.33	*	1.57	2.18	**	1.34	1.91	**	2.33	2.85	**
問題解決				2.24	2.71		1.50	2.25	*	2.52	3.19	**
クロージング	2.66	2.64		1.44	2.14	*	1.51	1.56		2.65	2.63	

*p<0.05 **p<0.01

表3 演習に対するアンケート結果

名 (%)

質問項目	回答	理由の内訳	質問項目	回答	理由の内訳
演習は楽しいか	はい 30(60)	学びが多かった, 臨場感がある, 新鮮等	看護師役をしたいか	はい 19(38)	意見や指摘がもらえて役に立つ, 自分の力を試せる等
	どちらともいえない 16(32)	緊張がありすぎ, 楽しいというより学びが多かった等		どちらともいえない 20(40)	緊張するがためになる, 自信がない, 緊張する等
	いいえ 4(8)	真剣な場面であったので楽しくはなかった		いいえ 11(22)	知識・技術が未熟, 不安等
演習は難しいか	はい 48(96)	臨機応変さを要求される, 緊張する, 一つの行動でも受け止め方が違う, 知識・技術が未熟等	役立つか	はい 50(100)	客観的に振り返れる, 実習に役立つ, 本番のようにできたから, 臨機応変さを要求される等
	どちらともいえない 1(2)	わかるところとわからないところがあった			
	いいえ 1(2)	無回答			
集中できたか	はい 49(98)	Ns 役のつもりで見ていたから, 今までの授業とは異なり興味があった, 緊迫した場面だから等	リアリティがあるか	はい 46(92)	本当の患者のようでSPの演技が上手, SPは初対面である, SP・Ns役ともリアルに演じていた, 会話の内容が実際にありそう等
	どちらともいえない 1(2)	無回答		どちらともいえない 4(8)	ギャラリーが気になる, 実習経験が少ない等

表4 感想の内容

カテゴリー	サブカテゴリー	記述例
学習の効果	振り返りの効果	他の人の意見を聞くことで自分の中に取り入れられた
	自分で対処方法を考える効果	自分だったらと考えながら見ていた
	効果的なコミュニケーションの方法	コミュニケーションをとるには患者の観察や生活を知ることが大切
	SPの授業の有効性	学生同士では味わえない緊張感があった
	事前学習の有効性	事前学習でさらに深く学べた
	今後に向けての学習効果	多くの人の中で看護をするのは緊張するが今後には生かせる
SP活用の感想	SPに対する戸惑い	SPはリアリティがあったが実際とは違うと思った
	SPの有効性	SP, Ns役がリアルで全体に雰囲気もよく積極的に参加できた
コミュニケーション技術への統合	臨機応変な対応への戸惑い	臨機応変に適切な対応することの難しさを実感した
	Ns役への思い	日常的な会話から話しかける必要があった
	個別性を考慮した対応の必要性	個別性に合わせた介入が必要だ
SPを通して気づいた自己	未熟な自分の今後の課題	学内の人とはしか会話する機会がなく実習となると会話に困る
	自己の気づき	相手の立場に立って考えることの難しさがわかった
演習に不足していた点	演習への要望	もう少し時間があると多くに学生がSPと対応できる

〈演習への要望〉のサブカテゴリーからなる《演習に不足していた点》の5つのカテゴリーが抽出された(表4)。

考 察

1. 学生-教員間の評価の相違について

グループでの振り返り後の議論では, 良かった点や改善点等が適切に発表できていたが, チェッ

クリストに沿った学生の他者評価が高かったのは, 大勢の前で緊張しながら演じるという状況の中で, 自信を持ってない自分と比べると看護師役の学生はできていたと感じたのではないかと考えられる。援助技術において, どの事例も教員より学生の評価が高いことは, 各技術の押さえるべきポイントが十分に理解できていない可能性もある。また, 「患者の気持ちや理解のテンポに合わせる」ことの評価が教員より学生の方が高いのは, 学生

が自分のペースで援助を行おうとしている現われであろう。

事例2や3のように患者の不安を尋ねる場面では、学生の評価の視点はSPが発した不安の内容をより深めることができたかどうかではなく、「不安はありませんか」のように患者に尋ねることができたかどうかにとどまっている。一步踏み込んで患者の気持ちや状況を詳しく聴くことの重要性を理解する必要がある。学生が適正な評価を実施できるように、今後、チェックリストの評価基準を検討し、改善を図る必要がある。

いずれにしても、今回の調査ではチェックリストで学生個々が評価を行ったのは、グループやクラス全体での議論、SPや教員によるフィードバックを行う以前である。議論やフィードバックにより、どれだけ自分が観察・洞察できていたかについて認識し、それを反映させて評価を修正することが重要である。学生が適正に他者評価、自己評価できるようになれば、教員との相互評価において評価のずれが生じることも減少し、教員が行った評定に対する不満も解消されるであろう。

今回、事例毎にSPや教員のフィードバックまでを進めていったが、回数を重ねても教員との評価のずれが縮まることはなかった。基本的なコミュニケーション技術や態度を学ぶだけでなく、場面を客観的に洞察することにも重点を置いた演習の目的・目標を掲げる必要がある。

2. SPを活用した演習の学習効果

90%以上の学生がリアリティがあり、集中でき、役に立つと答える等、SPを活用した演習は、情意領域において好ましい学習効果を得た。一方、学生同士で演じる演習では感じ得なかった緊張感や戸惑い、臨機応変さを必要とされる等の感情の揺らぎもみられた。また、個別性を考慮した援助の必要性、コミュニケーションの難しさを実感している。これらの結果は前年度の調査²⁾と同様である。

今回の学びの特徴は、SPとの対応の中で対象に合わせた知識や技術の統合に関する理解や自己の気づきを深めていることであった。それは、各振り返りの中で観察者としての学生やSP、教員からの意見や感想が大きく反映しているが、それだけではなく、演習の事前学習として課題を課したことも有効であったと考えられる。

また、基礎看護学実習Ⅱ（看護過程を展開する2年次の2週間の実習）の実習後にSPを活用し

た演習が実習に役立ったかどうかを学生に尋ねたところ、42%の学生が役立ったと答え、「実習に近い状況での演習を体験していたので実習での緊張感が和らいだ」、「患者がネガティブな思いを口にした時、無理に励ましたりするのではなく、ありのままに傾聴することができた」、「患者が暗い表情や無言になった時、SPの場面を思い出して頑張れた」、「患者にイヤと拒否された時の対応に役立った」、「どのように患者に話しかければよいかに役立った」等の感想が得られ、演習での体験が実習のイメージ化につながっていたこと、また、体験を実習において活用できていたことがうかがえた。

このように、SPを学内演習で活用することは、臨床経験の少ない学生が講義で得た理論的知識と実践を統合させる上で重要な役割を果たしているといえる。演習で学んだ学生の気づきを実習で活用できるように、体験の統合を図る意図的な関わりが重要である。今後は、演習時間の余裕を持つことにより、意見交換や体験の統合、さらに多くの学生が看護師役を体験できる企画の工夫が望まれる。

3. SPを活用した演習の今後の課題

次回の演習から、4年制大学の1年次生が対象となる。教育課程も短期大学とは異なる。短期大学では基礎看護学の「基礎看護技術論」という科目のなかに「コミュニケーション技術」として位置づけていた。4年制大学では、基礎看護学方法論という体系のなかに「人間関係論」として科目が位置づけられ、「コミュニケーション技術」のみならず、「自己理解・他者理解」を促す演習、「カウンセリング技法」を修得する演習が含まれている。それは、大学教育における教養教育を基盤にして、看護専門科目で看護専門職にふさわしい人間関係を形成できる能力の育成につなげていく意図がある。短期大学の教育に加え、学生が他者と関わるなかで、自分を客観的に把握し、それを真摯に受け止め、その改善に自ら取り組める能力を育成することが求められる。このような能力を育成する教育方法としてSPを活用した演習は有効性をもつだろう。

SPを活用した演習は、あくまで想定された患者として演じられたものであり、SP自身も看護実践場面を演じることに困難を生じている。SPは病歴や症状を質問されて反応することはできるが、看護実践場面において、その人固有の反応を

演技することが難しく²⁵⁾、共感的理解にまで至らない可能性がある。SPの演習において、単なるコミュニケーション技術の修得にとどまることなく、人間関係形成能力を修得するには限界がある。

そこで、このSPの演習では、観察者として看護師役が演じているコミュニケーションや態度、SPとの相互作用、看護技術等を客観的に捉え、それを深く洞察し、適正に他者評価や自己評価ができ、自ら改善に取り組める能力を育成することに主眼を置いた方が、より実習時に学生の成長を促すのではないかと考える。杉森は「自己評価は自分を外側から客観的にとらえ、さらに内側から見つめ直すという意義を持ち、『わかること』と『わからないこと』、直面している問題の明確化、問題解決に向けた目標の設定、学習することの意義の理解につながる。このような意義と特性を持つ自己評価は自己教育に結びつくという点できわめて重要な機能を持っている」と述べている²⁶⁾。看護専門職として自律性を養成するためにも、今後ますます自己評価の重要性が高まることが考えられる。自己教育に結びつく自己評価ができるためには、まずは適正に他者評価ができるように教員の支援が必要である。観察者として他者評価を正しく行うことができれば、適正な自己評価にもつながるだろうと考える。

その成果を挙げるためには、教員の教育力を向上させることも重要である。今回、教員のチェックリストを用いた評価において、評価の不一致がみられた。同じひとつの看護行為を評価するのに教員による差異が生じていると、学生の不信感を招きかねない。教員間で一致した評価基準を持つと同時に、教員自身の人間性、洞察力や指導力等、資質・能力の向上に対するFD (Faculty Development) の推進も必要である。SPを活用した演習で一致した評価ができれば、実習において各教員が行う評価の差異も減少するであろう。このように教員のFDにおいてもSPを活用することは有効な方法であると考えられる。

結 論

SPを活用した演習の学習効果と学生の場面状況の洞察力を教員との演習評価の相違から検討した結果、以下のことが示唆された。

1. SPを活用した演習は、情意領域において有効

であった。

2. 感想を分析した結果、《学習の効果》《SP活用の感想》《コミュニケーション技術への統合》《SPを通して気づいた自己》《演習に不足していた点》の5つのカテゴリー、14のサブカテゴリーが抽出された。
3. フィードバックによる意見の他に、事前学習として課題を課していたことが、対象に合わせた知識や技術の統合に関する理解や自己の気づきを深めるのに反映されていた。
4. 学生個々が観察者として実施した他者評価は、教員に比べ、特に援助技術に関して評価が高かった。
5. SPを活用した演習は、学生が適正に他者評価・自己評価できる能力を育成するのに活用価値が高い。
6. 教員の教育力向上に対しても、SPを活用した演習は有効である。

文 献

- 1) 看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標 (2003) 看護学教育の在り方に関する検討会報告, p 14.
- 2) 堀美紀子, 松村千鶴, 淘江七海子 (2003) 模擬患者を導入したコミュニケーションスキルトレーニングの学習効果. 香川県立医療短期大学紀要5: 105-114.
- 3) 吉川千鶴子, 草野ひとみ, 黒髪恵, 中嶋恵美子 (2002) 実習導入学習における模擬患者 (SP) 参加によるコミュニケーション場面の体験学習の学び. 日本看護技術学会第1回学術集会講演抄録集 (東京), p70-71.
- 4) 藤田智恵子, 鈴木玲子, 高橋博美, 常盤文枝, 山田皓子 (2003) 学生の心理特性と模擬患者を取り入れたコミュニケーション演習の効果に関する研究. 第23回日本看護科学学会学術集会講演集 (三重), p450.
- 5) 太湯好子, 竹田恵子, 兼光洋子, 三徳和子, 中新美保子 (2003) SP (模擬患者) を利用した共感的コミュニケーション能力を高める看護教育の試み (第一報). 日本看護研究学会雑誌26(3): 387.
- 6) 鈴木玲子, 高橋博美, 藤田智恵子, 常盤文枝, 山田皓子 (2003) 成人看護学における対象理解を深める教育方法の検討 (その1) -SPを取り入れた2年間の教授活動の分析より-. 日本看護学教育学会第13回学術集会講演集 (長野), p207.
- 7) 藤田智恵子, 鈴木玲子, 高橋博美, 常盤文枝, 山田皓子 (2003) SPを取り入れた対象理解を深める教育方法

- の検討(その2) -患者とコミュニケーションに関する心理変化の考察-。日本看護学教育学会第13回学術集会講演集(長野), p208.
- 8) 常盤文枝, 鈴木玲子, 藤田智恵子, 高橋博美, 山田皓子(2003) SPを取り入れた対象理解を深める教育方法の検討(その3) -模擬患者とのコミュニケーション演習が及ぼす心理的影響-。日本看護学教育学会第13回学術集会講演集(長野), p209.
- 9) 鈴木玲子, 高橋博美, 藤田智恵子, 常盤文枝, 山田皓子(2003) 成人看護学における対象理解を深める教育方法の検討[1] -SPを取り入れたコミュニケーション授業の導入と展開-。看護展望28: 334-340.
- 10) 常盤文枝, 鈴木玲子, 高橋博美, 藤田智恵子, 山田皓子(2003) 成人看護学における対象理解を深める教育方法の検討[2] -SPを取り入れたコミュニケーション授業の結果と評価-。看護展望28: 456-461.
- 11) 大池美也子, 村田節子(1999) 看護学生に対する模擬患者を用いたコミュニケーション技術教育の検討-演習終了後のレポート内容の分析から-。九州大学医療技術短期大学部紀要26: 67-72.
- 12) 池田明美, 富田幸江, 佐川みゆき, 関根由紀子, 福田泰子(2000) コミュニケーションの理解を深めるための基礎看護学実習前演習の試み-学生以外の模擬患者を導入して-。看護教育の研究17: 118-121.
- 13) 堀江三恵子(1997) 老人看護課程における対人関係の演習として模擬患者参加のコミュニケーション演習の教育的評価。神奈川県立看護教育大学校紀要 20: 5-9.
- 14) 本田芳香, 塚越フミエ(2001) 模擬患者導入による学習の有効性。東京女子医科大学看護学部紀要4: 33-38.
- 15) 堀口雅美, 大日向輝美, 酒井英美, 木口幸子, 稲葉佳江(2001) 基礎看護学における看護過程演習保法の検討(その2) -模擬患者を活用した看護計画の立案-。日本看護学教育学会第11回学術集会講演集(横浜), p 195.
- 16) 河合千恵子(2001) 模擬患者を利用した教育が学生の態度に与えた影響。Quality Nursing 7: 577-583.
- 17) 新垣利香, 石川りみ子, 前原なおみ, 伊藤幸子(2003) 成人保健看護における看護過程演習の学習効果(第1報) -模擬患者を用いた看護過程演習から見えてくるもの-。日本看護学教育学会第13回学術集会講演集(長野), p75.
- 18) 仁平雅子, 登喜和江, 山下裕紀, 柴田しおり, 川西千恵美(2002) 複数の模擬患者を活用した「観察」に関する教育方法。神戸市看護大学紀要6: 19-27.
- 19) 矢野理香(2003) フィジカルアセスメントの模擬患者演習における学生の学び。天使大学紀要3: 1-11.
- 20) 平野由美, 石川雄一, 中田康夫, 田村由美, 津田紀子(2003) 模擬患者を導入したヘルスアセスメント実習に対する授業評価。日本看護学教育学会第13回学術集会講演集(長野), p234.
- 21) 清水裕子, 大学和子, 野中静(2002) 基礎看護技術実技試験におけるSPを導入したOSCEの試み。聖母女子短期大学紀要15: 53-63.
- 22) 大久保祐子, 星光やよい, 豊田省子, 菅野こずえ, 亀田真美, 野中静, 田口ヨウ子(2003) 標準模擬患者を用いた基礎看護学における客観的臨床能力試験の試み。日本看護学教育学会第13回学術集会講演集(長野), p235.
- 23) 大池美也子, 長家智子, 北原悦子, 篠原純子, 松木美奈子, 吉中里香, 赤司千波, 丸山マサ美(2003) 模擬患者による基礎看護技術テストの効果と今後の課題。日本看護学教育学会第13回学術集会講演集(長野), p 69.
- 24) 藤崎和彦(2001) 模擬患者によるコミュニケーション教育-その歴史とコミュニケーションのポイント-。Quality Nursing 7: 548-556.
- 25) 堀美紀子, 松村千鶴, 淘江七海子(2004) 看護実践場面を演じる模擬患者としての体験の分析。日本看護研究学会雑誌27(3): 175.
- 26) 杉森みど里(1999) “看護教育学”, 第3版, 医学書院, 東京, p208.

受付日 2004年10月29日